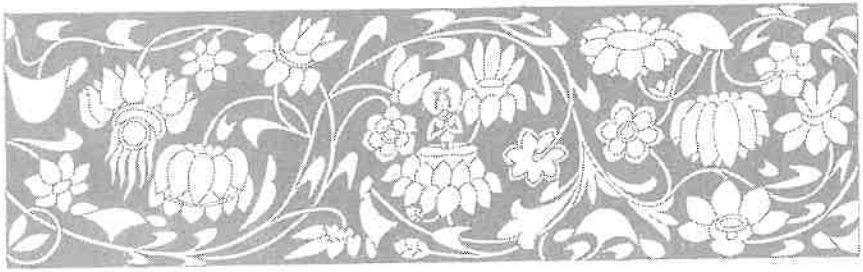
# 剃髪体験をして

井上葉智

それは、数年まえのこと。
月に一度、水野弥穂子先生の主宰する福田会で、共にお袈裟作りに励んでいた方が剃髪をされた。
そのすがすがしい姿に、わたしは思わず目を見張った。
常に笑みを湛え、穏やかな彼女の秘めた「志し」を不覚にも、わたしは気づかなかった。
その後、尼僧院で二年間の厳しい修行を勤めあげ、めでたく尼僧になられた。
相変わらず、彼女は福田会にお見えになっている。



十二年まえのこと。
わたしは、西嶋和夫老師に相見し、坐禅とご提唱の会に出席して、ご慈教を頂戴している。
三年目、授戒会に参列し老師より厳かに受戒を戴いた。
そして九年目のいま、在家人のままで剃髪をした。
五月三日、西嶋老師の授戒会の儀式のあとに、わたしは七條衣の黒袈裟の拝受という形で、剃髪を味わう。

仏道は、いまを暮らしている人間の「生きざま」を、問題とする。
個人の問題からはじまる。
極楽も地獄も現世のこと。未来や過去のことではない。
議論したり、知識をひけらかしたりするものでもない。
もちろん、正しく「仏教」「仏法」を、充分に勉強することは大事であるが、「仏行」「仏道」の、この四つの意味の違いを充分に認識することが大事である。
仏教が「行いの哲学」であるといわれるのは、その辺りを指しているのだろう。
「喰わねばわからぬ饅頭の味」と、いまは亡き沢木興道老師も言わ

れているではないか。

起床し、洗面をし、衣服を着、飯を喰い、仕事をし、金を稼ぎ、その多寡に心を揺らし、身近な人をあげつらう、人の日々の行動。その行ないが問題なのである。

その暮らし、本人が極楽なら結構だ。地獄も良いと言うならば、それもまた結構なことである。

極楽にいながら地獄と感じたり、地獄にいながら極楽と感ずる。その不合理はどこから来るのだろうか。

人間の業とは何んなのだろうか。と、疑問を投げ掛ける人に、お釈迦様は仏の道、真理の道を、いろいろな形で示してくれた。その後に現われた、仏々祖々の正伝のお陰で、わたしたちは仏教を知ることができた。

人の心はすぐ変わる。自然の姿も無常である。

刹那、刹那。瞬間、瞬間のなかで、泡のように生きているにも関わらず、永遠不滅がある。と錯覚するところから、迷いや、執着が生じてくる。瞬間の重みを忘れる。

「いま、おまえは何をしているか…」という、行ないの世界の貴重なこと、夢にも気づかずに。

確かな行ない。正しい行ない。悪い行ない…ｅｔｃ。
「心」は無限の「行動」を、想像することが出来る。
想像したことで、さも「行動」したかのような、錯覚に陥る。厚かましくもあり、哀れなことでもある。
只管打坐。半畳の中で只、坐る。「我」を凝視する。
実践することでその尊さに気づき、直観力は養われる。

剃髪をした。在家の私は、また有髪になるだろう。
この機会に、ご縁の寺々に表敬訪問をする。わたし…